

# weaving stories

基本コンセプト 蔵書や郷土資料を縦糸に、小千谷に暮らす人々の経験を横糸に。  
 利用する人それぞれの物語～小千谷のもの・こと～を紡ぎだす、情報環境の構築をめざします。

図書館機能を中心とした複合施設の役割を考える時、その場所を利用(参加)することで、市民が新たな価値を紡ぎだしていける施設設計と、それを支える情報環境が重要となります。

今回、施設・情報環境・運用者(図書館職員)・利用者(市民)を相互につないで参加を促していくハブとして、館内に設置されるフロート(移動式書架)を位置づけています。フロートはテーマにそった書籍を展示する「特集棚」の機能があり、それは利用者にとって新しい発見のきっかけ、参加の起点となります。

情報環境では、フロートごとにテーマに沿って集められた蔵書・資料間のつながり(文脈)を一時的な物理的展示とするだけでなく、再利用可能なメタデータとして管理するシステムを用意します。このメタデータも検索・探索対象とすることで、新しいフロートを企画す

ることはより豊かな文脈情報を蓄積していくこととなり、利用者にとってはこれまでたどりつくことが難しかった蔵書や郷土資料と出会う機会を増やすという循環ができます。

個々の蔵書や郷土資料は大切な情報であり、図書館管理システムやデジタル・アーカイブシステムを用いて効率的に管理していくことは、図書館運営において当たり前に必要な機能です。ですが、それだけでは単なる情報の蓄積に過ぎません。他図書館の蔵書を含めた横断検索による「見つけることができる情報の拡大」と、書誌情報にとどまらない「文脈情報の管理と活用」が、デジタル時代の図書館運営において重視されていく機能であり、提供していくべき体験と考えています。

「特集棚」としてのフロートをきっかけに、利用者は興味関心に従って関連す

ることを進めていきます。

また、2024年6月の開館後も対話機会を想定しています。ここでいただくフィードバックや意見から、2024年12月までに対応するもの、今後の課題として検討していくものを整理し、情報環境の活用・改善を図っていきます。

### 業務体制と参加企業の特徴

今回の提案は、基本コンセプトを実現するための情報環境構築を目的としています。この情報環境が提供する機能や体験については、様式第12号および様式第13号に記載しますが、全体として右図に示す要素を統合したシステムとなります。

今回提案する情報環境を実現するために、CEC新潟情報サービス(株)を統括

する蔵書や資料を検索・探索して知識を深め、図書館複合施設内の各アンカーを活用して別の価値を紡ぎ出し、それが未来のフロートで紹介される。私たちは、そうした価値の循環に参加できる情報環境を構築します。

小千谷市の特産品である小千谷縮にかけると、蔵書や郷土資料は縦糸であり、小千谷に暮らしてきた・暮らしている人々の経験は横糸として縦糸をつないでいきます。この縦糸と横糸によって紡がれる(weaving)もの・ことは、小千谷の物語です。図書館複合施設の利用者は、蓄積された縦糸と、さまざまな経験の横糸について、考え、見つけ、紡ぎ出すことで、その物語の続きに参加していきます。

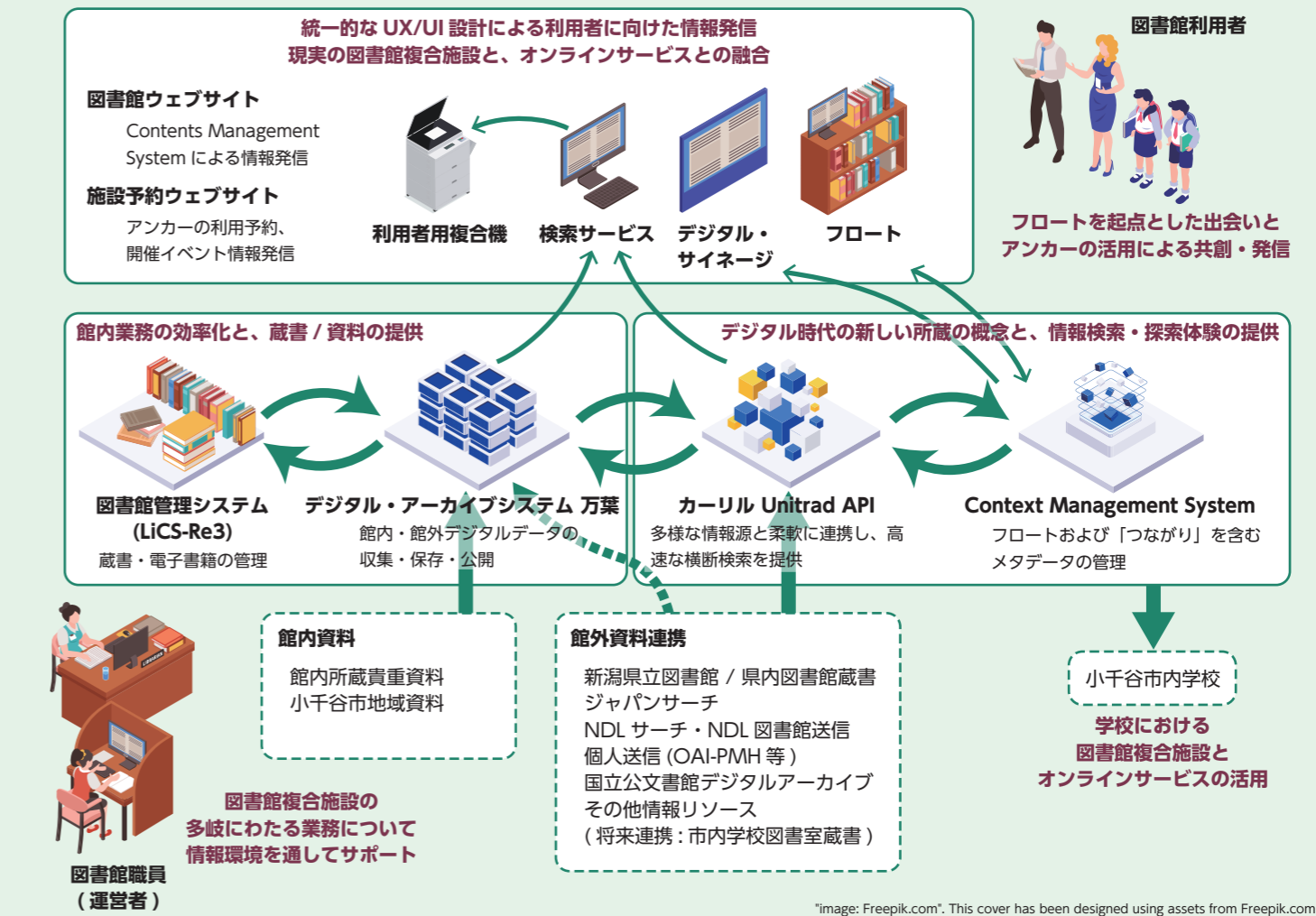
私たちが提案する情報環境の基本コンセプトは、「小千谷の物語を編み続ける、織織り機」をつくることです。

企業とし、図書館システム、横断検索システム、UX/UI設計等の各分野を専門とする協力企業とともに開発を進めていきます。

CEC新潟情報サービス(株)は新潟県内に本社をおく地場企業として、今回の小千谷市のプロジェクトにおいても地域に密着しながら情報環境の構築と運営サポートを提供していくとともに、小千谷市と協力各社とをつなぐハブとして機能します。

協力企業のうち、特に、NEC情報サービス事業グループの参画企業は、過去にも各社の得意分野を生かした協力体制を構築しており、全国の自治体や公共施設にさまざまな情報システムを提供してきました。グループ間の情報共有も密に行っており、各業務間をまたがるシステム連携についても、使いやすさを配慮した形で提供しています。

### 図書館複合施設 情報環境 概要図



### 仕様策定とシステム開発のすめ方

詳細な内容は様式第14号に記載しますが、私たちが考える仕様決定のプロセスは、単に市民の声を聞きその要望を要件に取り込むことではありません。私たちが構築をめざす情報環境のコンセプトを共有し、理解いただいた上で、利活用のアイデアを共創していくプロセスとして位置づけています。

私たちが掲げる基本コンセプトは、簡単な言葉で表現すると、「集めて」「編む」こと、つまり「編集」の仕組みづくりです。編集の対象は、小千谷に暮らした人々が郷土に残した資料や経験であり、編集の結果として編みあげられるものは小千谷の人々の物語です。この基本コンセプトの共有と、その実現のために情報環境が持つべき機能について利用者・運営者と対話する機会

### 情報環境構築 参加企業 一覧

参加企業	協力企業	統括責任者
CEC新潟情報サービス(株)*	CEC新潟情報サービス(株)* システム開発部	システムインテグレーション担当
NECネクソソリューションズ(株)*	(株)ソフェル	<ul style="list-style-type: none"> <li>図書館管理システム (LiCS-Re3)</li> <li>IC 機器 / IC タグ</li> <li>施設予約 / 管理システム</li> <li>利用者用複合機</li> <li>図書館システム 構築支援</li> <li>IC 機器、IC タグ 構築支援</li> <li>利用者用複合機 導入支援</li> <li>施設予約 構築支援</li> </ul>
(株)カーリル	(株)寿限無	横断検索、検索 API 担当
ソシオメディア(株)	(株)BCC *	デジタル・アーカイブシステム担当
		<ul style="list-style-type: none"> <li>郷土資料管理</li> <li>UX/UI CMS 担当</li> <li>地域情報の収集・発信・管理、資料検索、探索</li> <li>デジタル・サイネージ担当</li> </ul>

\*NEC 情報サービス事業グループ参画企業

# weaving context

利用する人それぞれの物語～小千谷のもの・こと～を紡ぎ出すために、フロートを起点とした蔵書・資料との出会いを促進する、情報環境の構築をめざします。

## フロートの位置づけと、情報環境が解決すべき課題

図書館複合施設内に設置される移動式書架「フロート」は、他のフロートとの相対的な位置関係を含めて「その場所で紹介したいテーマ」「そのフロートに収められた蔵書・資料間の関係(強いつながり)」「他のフロートとの関係(弱いつながり)」といった、従来よりも豊かな文脈を提供できることが特長です。

一方で「フロート」は、図書館で一般的な十進分類をもとに整理された書架ではないため、利用者にとっては「目的を持って本を探す際に不便」、運営者にとっては「蔵書がどこにあるか(どこに配架すべきか)把握しにくい」といった短所も想定されます。

情報環境にまず求められるのは、フロートの特長を最大限に活用できる表現・機能を提供すると共に、利用者・運用者が感じるであろう短所を減らすような機能的・体験的な設計を行うことです。つまり、図書館管理システムやデジタル・アーカイブを活用して蔵書や郷土資料を効率的に利用・管理することに加えて、フロートに掲出できる豊かな文脈情報を ① どのように表現・活用するか、② どのように作成・管理するか、そして過去のフロートの内容をふくめて ③ どのように検索・探索できるか、という3点が、情報環境において利用者・運

営者それぞれの立場に対して解決すべき課題になると考えており、以下に解説します。

情報環境を構成する具体的なシステム要素や拡張性については、下部および他様式資料に記載します。

## フロートの表現と、検索・探索

各フロートには、タブレット端末を使用したサイネージを設置し、そのフロートのテーマや、紹介されている書籍や関連資料についての情報を、それぞれの間をつなぐ(文脈)とあわせて表示・提供していきます。これは、フロートに掲出された内容から、フロートの外側の情報(蔵書やデジタル・アーカイブに収録された資料)へとつなぐ役割の他、フロートに展示された蔵書が貸出状態にあっても、そこに何があったかを伝えるという役割をはたします。

関連する情報のまとまりを表現する際には、共通する特徴によるグループ分けが一般的です。図書館であれば十進分類別・著者別・出版社別などのような形で、書架整理・検索等に利用されてきました。

これに対して、フロートが表現するテーマやつながり(文脈)は、項目間の関係性を記述します。古くは「KJ法」のような発想支援法や、最近では「偏愛マッ

プ」のような技法がよく知られています。が、つながり(文脈)はそれぞれの項目情報以上に、それぞれの理解・興味・関心を素早く詳細に提示します。

一般的な蔵書検索では、共通する特徴によって書籍が分類されていることを前提に、利用者は「探したいもの・ことを表す適切なキーワードを知っている」ことではじめて活用できます。こうした検索方法は、目的を持った深掘りの際には役立つかもしれませんが、気軽に驚きのある新しい出会いを体験することは難しいでしょう。

フロートによる探索体験は、出会いの最初の一步を運営者が用意した「特集棚」として提供し、利用者はそこから広がるさまざまなつながり(文脈)をヒントに新しい出会いを探る、興味・関心の散歩のようなものです。

そして、この散歩道は、つながり(文脈)が蓄積されていけばいくほど、散歩の度に異なる顔を見せる、表情豊かな散歩道になっていくでしょう。

## フロートの作成と管理

フロートで紹介する蔵書・資料をテーマに沿って集め、そのつながり(文脈)を設定していく作業は、まさに「編集」という行為です。このような行為は、今回の情報環境で初めて構想されたわけ

ではなく、これまでの市立図書館ウェブサイトでも「資料」コーナーにエクセル形式の独立したファイルとして提供しています。

一方でシステム化されていないため、利用者にとっては「ファイルがエクセル形式のため活用しにくい」「ファイル内の書籍情報からすぐに検索することができない」「書架から見つけにくい」といった使い勝手の課題があり、運営者にとっても独立したファイル単位となっているため作成・更新がしにくいものだったと考えられます。

今回提案する情報環境では、特定のテーマに沿った蔵書・資料のつながり(文脈)を編集し、共有する機能を情報環境の重要な機能としてシステム化します。この機能はフロートに掲出する情報の作成・管理を第一の目的としますが、同時に館内の情報端末にフロートの内容を表示したり、ウェブサイトにも掲載可能なデータとして活用することも想定しています。また、過去に作成したフロートの情報を、蔵書検索の際のメタデータとして再利用することで、単なるキーワードの一致順序とは異なる意味的なつながりの強さを利用者提示することができるでしょう。これは、結果を絞り込む際のヒントとして、出会いを促進するものになると考えています。

## Contents Management System から、Context Management System へ

市民参加型の共創という場合、「作品を作る」「文章やプレゼンテーションを作って共有する」といった、一つのまとまったもの(作品・コンテンツ)を作るという点に注目しがちで、求める使いやすさも制作面や収集面を意識しがちです。こうしたコンテンツを中心とした共創は、素晴らしい取り組みになる場合もありますが、利用者は出来不出来を意識してしまうことが参加障壁となってしまう、結果として参加が減ってしまう場合があります。私たちが提案する情報空間にもコンテンツ管理機能が含まれますが、参加する方が少ない場合、そこには同じような完成度の作品・コンテンツが並び、多様性に乏しい「作品集」になる恐れもあります。そもそも「共創という施策がうまくいかなかった」という評価にもつながりかねません。

私たちが、フロートに掲出されるテーマやつながり(文脈)もメタデータとして作成・管理できるようにシステム化するのは、運営者にとってフロートを作成・管理しやすい情報環境を提供することだけが目的ではありません。新しいコンテンツを作成することが苦手な利用者にも参加機会を提供すること、言い換えると共創の敷居を下げて多様な参加

の形を促進することも目的です。そのような情報環境であれば、よりたくさんの利用者に、よりさまざまな方法で共創に参加してもらえると考えており、それこそが情報環境において重視されるべき「使いやすさ」であると考えます。

例えば、利用者それぞれが、自分が見つけたつながり(文脈)を作成し、共有できるようにすること。運営者はそうして共有されたつながり(文脈)の中から、興味深いものを新しいフロートに掲出するかもしれません。これは、市民が参加できる特集棚で、立派なコンテンツです。

子どもたちが興味のある絵本は、人気のあるものが取り合いになりがちです。ですが、人気順とは異なる、絵本のつながり(文脈)が共有されていたとしたら、次の絵本を選択する幅が広がるのではないのでしょうか。

教育現場でも、郷土史の学習などでこの情報環境を活用することができます。これまでに作られたつながり(文脈)を探索し、さらに別のつながり(文脈)や、そこからつながる家庭にあった資料を加えていくことで、より郷土について親しみ、理解を進めていくきっかけを提供できるでしょう。

つながり(文脈)をコンテンツとして活用する方法は、図書館複合施設の活用と共に広がっていくと考えます。

### 図書館管理システム [LiCS-Re3]

貸出、返却、蔵書管理など、図書館業務をトータルサポートする公共図書館向け管理システム。フロートのような移動式書架の管理にも対応した、柔軟な業務設計・業務運営が可能。

利用者の利用を促進する、読書記録やレビュー投稿といった機能も用意。利用状況による管理パラメータの調整や、電子書籍形式の蔵書を開始する場合の管理機能など、将来的な運営ニーズの変化による機能拡張にも対応。

### IC 機器 /IC タグ

図書館管理システムと連携するIC機器/ICタグにより、運営業務の効率化を実現。UHF帯を使用しており、蔵書点検は管理端末一台で3万冊/日の読取りが可能で、点検作業などの業務時間の短縮が可能。

貸出業務においても、利用者カードのバーコード、スマートフォン表示バーコード、マイナンバーカード等に対応可能。利用者のプライバシー保護と運営者の省力化に配慮した、効率的な貸出業務を提供。

出入り口に設置するゲートは、最大2mの幅がとれるほか、5cmの薄型設計のため、通路幅を広くすることが可能。運営業務の効率化だけでなく、ベビーカーのすれ違いや、お子様と手をつないでの入退場といった、快適な利用体験を提供。

### デジタル・アーカイブ

貴重な郷土資料をより多くの人に利用してもらうために、(株)寿限無が提供する、全国各地の図書館/施設に導入実績があるデジタルアーカイブシス

テムを導入。実績のある機能だけでなく、収蔵資料のデジタル化・運用のノウハウについてもサポート。

運営者が用意する資料の他、市民からも資料を提供できる仕組みを用意することで、市民参加型の資料蓄積と情報発信にも対応。

### 横断検索

(株)カーリルが提供する蔵書の横断検索を導入。県立図書館など他の図書館の蔵書や、各種データベースにも柔軟に接続でき、高速に検索可能。

市内の学校図書室の蔵書に対しても横断検索の範囲を拡大することで、各学校図書館と連携して蔵書・資料を活用するような、将来的な拡張にも対応。

### デジタル・サイネージ

可動式のタッチパネル式ディスプレイを設置。

新着図書やおすすめの蔵書の他、館内施設(アンカー)の利用状況やイベント情報・利用案内・所蔵資料・電子データ資料案内・市からのお知らせ・観光情報・SNSフィード等が表示可能。

一方的な表示ではなく、タッチパネルを通して利用者が知りたい情報を選択可能。

### 利用者用複合機

フロートに設置したタブレットや利用者検索端末、貸出端末等からの印刷にはカラー複合機を設置。

利用者は、各端末からの印刷操作後、図書館カウンターにて端末番号を伝え、ICカードを借り受ける。このICカードを複合機にかざすことで印刷が開始されるため、印刷内容が他人の目に触れ

ることを回避。

### 施設予約 / 管理

館内施設(アンカー)の予約は、ウェブサイト(PC/スマートフォン/タブレット)からの直接予約だけではなく、電話・FAX等での予約代理入力に対応。登録済みの利用者であれば、係員が予約や利用状況確認の代行が可能。

ユーザビリティ関連規格に準拠した画面構成や、利用者にあわせた文字サイズ・色合い指定機能等、幅広い利用者を想定したサービス提供が可能。

# weaving experience

小千谷に暮らす利用する人と運営する人とが、フロートとアンカーを通して相互に関わりながら「自分たち事」の物語～小千谷のもの・こと～と出会い、紡いでいく、体験の循環をめざします。

## 「出会う」体験と「紡ぐ」体験の循環

私たちが考える、図書館複合施設と情報環境が提供する体験とは、新しい何かに「出会う」体験と、新しい何かを「紡ぐ」体験が循環するものです。何かに出会って終わり、何かを探して終わり、何かを作って終わり、という独立した体験ではなく、蔵書・資料を紹介するフロートを起点として、情報環境が提供するつながり(文脈)から発見を重ね、施設(アンカー)を活用しながら新しい作品・つながりを作りだす循環を促すことを、ユーザーインターフェースデザインの指針とします。

## 能動的な利用者が体験する機会を、そうでない人にも提供するデザイン

最新の技術により構築されるシステムでは、利用者との接点となる端末などに対して能動的に使ってもらうことを前提に設計することがよく行われます。その上で、高齢者や障害者といった、サービスを使いこなすことが困難な方々への対応を追加していくことを、ユニバーサルなデザインとしています。

私たちの情報環境が考えるユニバーサルデザインは、高齢者や障害者といった方々への対応だけでなく、目的なしにふらりと訪れたような能動的ではない利用者でも、自分のペースで新しい出会いを体験でき、何かを紡ぎ出す体験に参加していけるような、ちいさなきっかけを整えることです。この「ちいさなきっかけ」となるのは、図書館複合施設の中に蓄積される、つながり(文脈)です。情報環境の機能として、つながり(文脈)をメタデータとして取り扱えるようにすることはこれまでも触れてきましたが、これは体験をデザインする上でも、重要な要素であると考えています。

## 情報環境が提供する出会う体験

### ① 情報環境

図書館複合施設に構築する情報環境は、図書館管理システムやデジタル・アーカイブシステムなどを組み合わせたシステムであり、蔵書・資料・フロートの管理を行う。また、横断検索機能や、各種情報をサイネージ等に配信する機能をもつ。(様式11号概要図参照)

### ② 運営者の図書館業務体験

情報環境を構成するシステムのうち、図書館業務で日常的に利用するのは、図書館管理システム、施設予約・管理システム、フロートやつながり(文脈)を管理するシステム(Context Management System)である。

図書館管理システムは、蔵書管理・貸出管理といった基本的な業務をサポートするが、IC機器/ICタグとの連携を取り入れることで、配架などの蔵書管理業務や、貸出・返却業務を効率化することが期待できる。

施設予約・管理システムは、主に施設(アンカー)を利用者に貸し出す際のスケジュールと備品管理業務をサポートする。システムでは、デジタル機器に不慣れな利用者も施設予約を活用できるよう、FAX等による代理予約機能を備えるが、運営者の業務量・業務フローを確認した上で、現実的な活用方法を確認していく。

フロートやつながり(文脈)の管理は、利用者の体験にとっても重要な機能であり、重要な業務になると考えられる。開館直後は、運営者のみがフロートやつながり(文脈)を取り扱うが、参加型の共創活動が進むと、市民による作成・共有も進むこと

が予想される。この際、不適切な内容の確認や取扱といった業務フローも検討し、業務上の手間を増やさないような機能として構築していく。

### ③ フロートに掲出されるもの

情報環境が管理しているテーマやつながり(文脈)の一部をとりだし、実際の蔵書を収めた移動式書架がフロートである。フロートに設置するタブレットには「どのような観点で選書されているのか」「選書された書籍間にどのようなつながりがあるのか」といったメタデータを可視化するとともに、関係するデジタル・アーカイブの資料等も表示し、新しい出会いにつなげる。

### ④ 図書館利用者の出会う体験をサポート

利用者が図書館に来館した際によくある行動として、サイネージに掲出されるような公共情報をまず目にし、次にフロートを巡り、興味を持った蔵書や資料について検索端末から検索し、開架書架の間を探索して興味ある蔵書を手に取る、といった流れが想定できる。また、特に気になった蔵書や資料については、印刷や貸出手続きといった行動につながる。

利用者にとって興味・関心から何かを発見する起点は、サイネージやフロートが提供するが、これらは公共の場に置かれた誰でも目にする情報である。

一方で、興味を持った内容を

調べたり、借りたりするような収集する段階では、それは公共に置かれた情報ではなく個人的な情報となっていく。個人的な情報については、利用者用複合機による印刷内容を他人が触れることのないような利用フローや、IC機器/ICタグを利用した貸出手続きのように、個人の興味・関心を詮索されない体験設計により、安心して興味・関心の収集に集中できるよう、情報環境の個人情報保護ポリシーを適切に定め、運用していくことも、豊かな出会いの体験の実現に重要な要素となる。

### ⑤ 図書館の利用から、施設(アンカー)の利用へのつながり

施設(アンカー)の利用予約は、さまざまなデバイスでの表示に対応したウェブサイトから申し

込む。利用状況はウェブサイトや館内サイネージに掲出される。誰でも参加可能なイベントの場合、掲出された情報を元に、すぐに参加申し込みできる導線を用意する。

また、例として「フロートで紹介している絵本についての読み聞かせ会をアンカーにて行う」といった企画の場合、フロートに設置したタブレットにもイベント情報を掲出し、参加申し込みの導線を用意するような連携に加え、読み聞かせ会での朗読音声をデジタル・アーカイブに登録し発信するような、当日参加できなかった方々にも参加機会を提供するといった連携も考えられる。

### ⑥ 施設(アンカー)利用者の体験をサポート

施設(アンカー)を利用する場合、公共施設であるという性格上、制作過程の体験だけでなく、

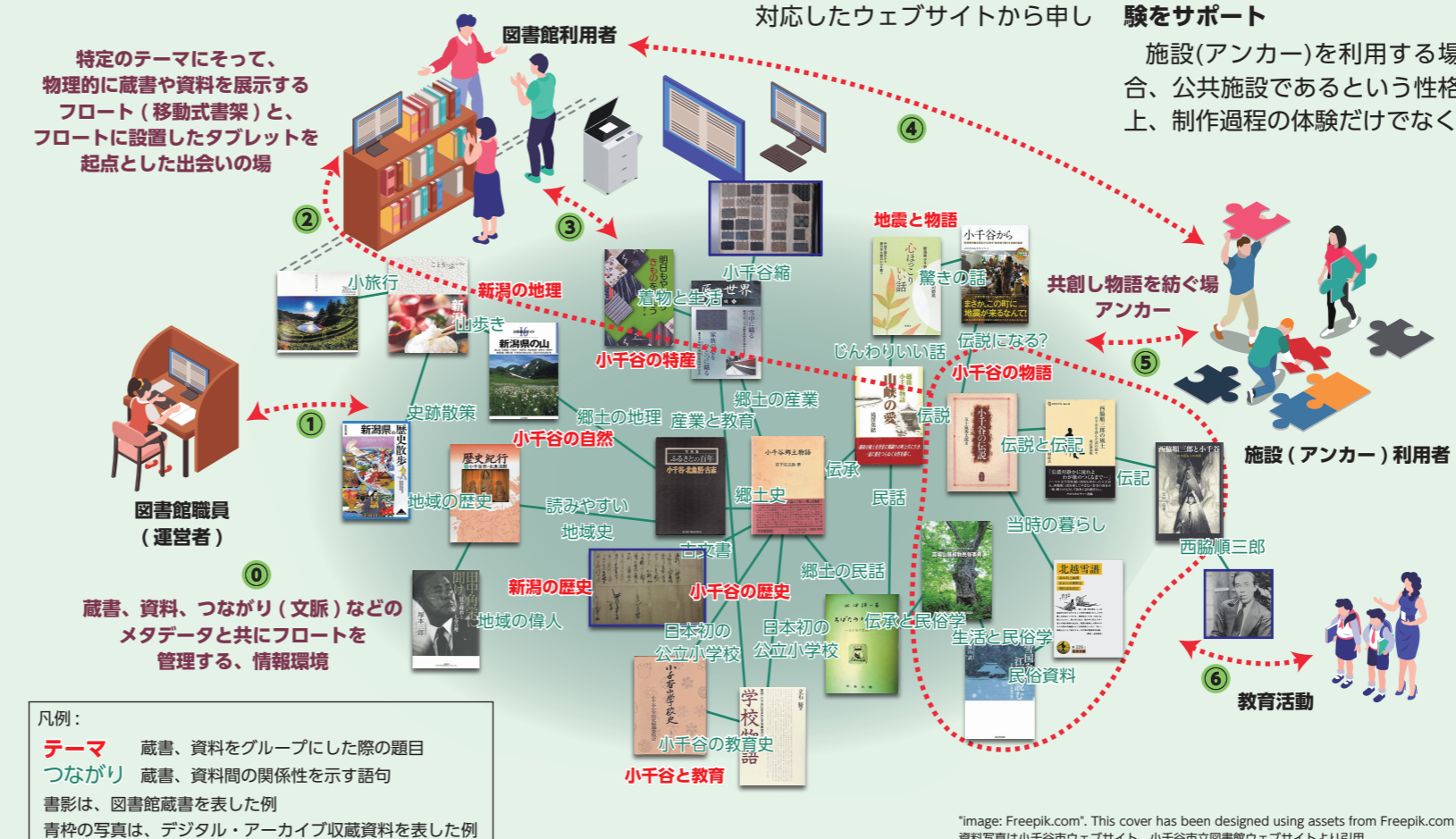
そこで紡ぎ出されたものを簡単に共有できることも重要になる。演奏・講演、創作・編集した成果物はもちろん、創作・編集のプロセス自体が共有されるべきコンテンツという場合もある。

施設(アンカー)を利用する際は、利用者に対して、得られたコンテンツ・資料・それぞれのつながり(文脈)を情報環境に登録する方法を提示し、成果物自体を次の出会いの素材として保存・継承する導線を用意する。

### ⑦ 教育現場での利用体験

現実の世界はさまざまな事柄が複雑につながりながら過去を構成し、現在に続いている。教育現場では教科毎に世界の複雑なつながりを分解して教えていくが、総合学習のように横断的な情報収集・思考・そのプロセスを可視化して発表する学びの機会も増えている。このような学びに、情報環境は効果的な機能・体験を提供できる。

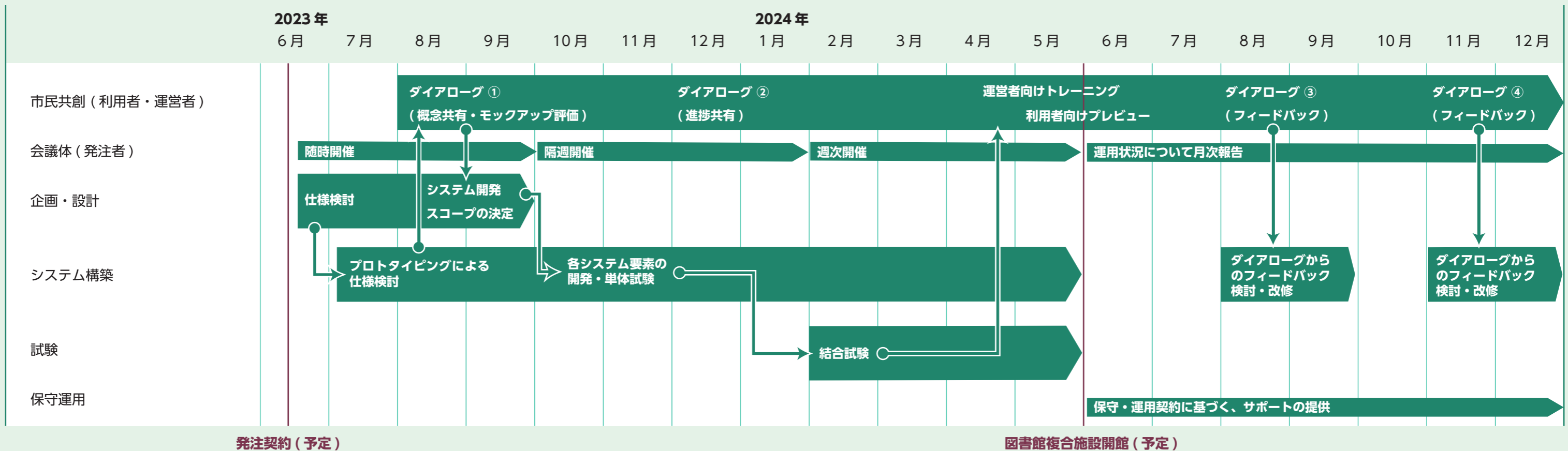
例えば、「小千谷縮」を調べる場合、目についた個々のものを対象に調べはじめ、その表面的な特徴から深掘りしていくことが多い。情報環境を利用する場合、個々のものだけでなく、つながり(文脈)が可視化されており、「なぜそのようなつながりがあるのか」といった横断的思考を促す効果が期待できる。小千谷縮の意匠が気になった時に、見本帳のような資料を探し当てて深掘りするだけでなく、つながり(文脈)を参照して「なぜ見本帳が作られたのか」「当時の意匠の変化」「当時の流通の仕組み」といった観点に気づくことができ、気づきを保存・継承することで、次の世代に学びの成果を伝えられるだろう。



"Image: Freepik.com". This cover has been designed using assets from Freepik.com 資料写真は小千谷市ウェブサイト、小千谷市立図書館ウェブサイトより引用。

# weaving process

情報環境の構築プロセスでは、私たちが提案する情報環境を活用して物語 ～小千谷のもの・こと～ を紡ぐ方法を、利用者や運営者と共有し、共創していくことをめざします。



情報環境を構築するプロセスでは、発注者との密な会議体を用意しながら進めるほか、最終的なユーザーとなる利用者・運営者との対話プロセス(ダイアログ)を4回程度設定し、進めていきます。

ダイアログは、システム開発における認識の齟齬を減らすことを目的とします。「専門家が使用するシステムに関する専門用語を、参加者それぞれが想像する」というような説明会方式で双方の認識に齟齬が生じることを避けるため、発注者との会議体やダイアログにおいては、システムの一部をプロトタイプによって仮に実装したモックアップで体験してもらうこと、工程終盤では実際のシステムを操作してもらうことを計画しています。

このようなプロトタイプを用いることで、私たちの考える情報環境を早い

段階で具体的に発注者・利用者・運営者と共有・確認し、フィードバックをうけながら、情報環境を構築していくことを進めていきます。

### ダイアログ① 企画・設計時の概念共有

私たちの考える情報環境の概念については、本資料および二次審査でのプレゼンテーションとダイアログにて説明します。それに加えて、受注後に改めて利用者・運営者に対して、情報空間の概念とその利活用について、対話の機会を予定しています。

ここで得られる意見を反映し、システム全体のスコープ(開発内容と開発範囲)および詳細工程計画を作成し、納品時の仕様として発注者より承認をいただきます。

### ダイアログ② 開発過程の進捗共有

開発期間中は、利用者・運営者に対しても、途中進捗を共有する対話の機会を予定しています。

この場合は、単に市民に対する予算執行状況の情報開示を目的とはしていません。IT分野に興味がある小千谷市の生徒・学生にも参加いただき、システム開発の工程とそこで行われている職務を知る機会を提供することも目的としています。

生徒・学生にとっては、各教育過程においてICT機器・サービスの利活用が進められている昨今ですが、実際の産業活動現場を知っていただく機会としてこの対話の場を提供することで、将来のキャリアパスを考える機会となることを期待しています。

### ダイアログ③④ 開館後のフィードバック

開館後、2回の実施を予定している対話では、主に情報環境の中心となる「フロート」が想定通り利活用されているかについて、意見交換を行います。

システムの利用状況をもとに、利用者・運営者がフロートを中心としたサービスに対して感じていることを洗い出し、システムの更新として解決するか、または運営方法の改善で解決するか等を検討していく場とすることを想定しています。

また、市民参加型のフロートの企画運営方法についても意見交換を行い、多くの利用者が情報環境を使用するだけでなく、そこに参加できる方法についても検討していく場とすることを想定しています。

### 開発・試験工程

システムを構成する各要素の開発については、パッケージを使用するもの、パッケージをカスタマイズするもの、新規開発するものに分類できます。

発注者とは、受注後に決定する詳細工程計画を元に、定期的に会議体を開催し、各要素の開発および試験の進捗を共有、円滑な開発工程の実現に努めます。会議体の開催頻度は、結合試験開始までの開発期間は隔週、結合試験開始後からトレーニング開始までは開館に向けたステアリングミーティングとして週次開催を予定しています。

各要素の単体試験後、図書館複合施設内にて機材設置を開始するタイミングで、全体の試験(結合試験)を行います。あわせて、運営者向けには、システムの利活用についてのトレーニングを提供します。

### 保守・更新・拡張の考え方

開館後の情報環境の保守は、受注後に合意するサービスレベル契約に基づいて決定され、対応範囲は納品時の機能の維持を想定しています。

情報環境を実行する環境(主にクラウド環境)では、ベンダーが提供するセキュリティ対応について、適宜更新していくことを予定しています。

開館後のフィードバック開催時には、利用状況をログなどにより確認した上で、各システムの設定値を最適化する調整を行います。納品時の仕様がない機能変更・可能拡張については、要望を精査し、予算承認されたものについて、対応を行っていきます。

このページに記載した工程計画は提案作成時点で検討しているものであり、共創内容を含む最終的な工程は受注後に決定するものとします。